

2022. 6. 26 (日) 使徒2:22~24

2:22 イスラエルの皆さん、これらのことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。それは、あなたがた自身をご承知のことです。

2:23 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。

2:24 しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。

<説教>

今からおよそ2000年前の五旬節（ペンテコステ）の日に、エルサレムで集まっていた使徒たち、イエスの弟子たちの上に、イエスが約束された聖霊が特別に豊かに注がれ、一人ひとりの上にとどまりました。すると皆が聖霊に満たされ、聖霊が語らせてくださるままに、他国のいろいろなことばで話し始めました。そしてその場に集まって来た大勢の人々は、イエスの弟子たちが皆それぞれ天下のあらゆる国のことばで神の大きなみわざを話しているのを目の当たりにして、「いったい、これはどうしたことか」と呆気にとられ、驚き、不思議に思い、当惑したのでした。また、中には「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って嘲る人々もいました。

それに対して使徒ペテロが他の十一使徒とともに立って、声を張り上げてそんな人々に語りかけ、初代教会最初の「説教」を始めました。「ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん、あなたがたにこのことを知っていただきたい。私のことばに耳を傾けていただきたい。」とまずペテロは呼びかけました。そして今皆さんが目にし、耳にしていることは前に預言者ヨエルによって語られたことだ、即ち皆さんが既に聞いており知っている聖書の預言が実現したことだとペテロは言いました。自分たちは酔っているのではなく、神が預言者に語らせたとおりに神の霊を神のしもべはしたためである自分たちに注いでくださっているのだとまずペテロは宣言しました。それはいわば序論であり、次に本論に入っていきます。

ペテロは初めは「ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん」と呼びかけましたが、今度は改めて「イスラエルの皆さん」と呼びかけます。「あなたがたは自分たちが神に愛され、選ばれ、あわれみを受けて来た民、神の偉大なみわざを何代にもわたって見聞きしてきた民、イスラエルだということをきちんと弁えなければならない。そういう者としてあなたがたはあなたがたは神と向き合わなければならない。神がイエスによってあなたがたに対して何をなさったか思い起こさなければならない。そのイエスに対して自分たちは何をしたかあなたがたは知らなければならない。更にそのイエスに対して神が何をなさったのかあなたがたは知らなければならない。その神の前にあなたがたは立たされているのだ。」そうペテロは語るのです。

まず言いました。「神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。それは、あなたがた自身をご承知のことです。」(22) イエスはイスラエルの人々の間では省みられて

いなかった〈ナザレ〉の人でした。「無学な普通の人」のはずだと見なされていたのは弟子たちだけでなく、イエスご自身もそうでした（ヨハネ 7:15）。しかしイエスはイスラエルの民の間で〈力あるわざと不思議としるしを行い〉ました。ひとえにそれは神のみわざであり、神は〈それによって、あなたがたにこの方を証しされました〉とペテロは言います。どう〈この方を証しされ〉たのかと考えると、「生ける神の子キリスト」だ、と言うのが大正解ということにはなるでしょう。とは言え、そう答えたかつてのペテロたちも「生ける神の子キリスト」についての理解、期待そのものが正しくありませんでした。「生ける神の子キリスト」が〈死の苦しみ〉を味わい、〈十字架〉につけられて殺されるなどということは絶対にあってはならないことでした。イエスの愛弟子たちでさえそうでしたから、他のイスラエルの民も同じでした。彼らはイエスの〈力あるわざと不思議としるし〉に驚きつつ、時にはそれで神を誉め称えつつ、しかしイエスを「生ける神の子」、神の約束のメシヤ（つまりキリスト）だとは認めようとしませんでした。反対に、イエスをねたみ、イエスを悪霊どものかしらだと言い張る律法学者や長老たちの声に従ってイエスを十字架につけると叫んだのでした。それでペテロは言います。「神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。」(23) イスラエルの人々がしたことは〈神が定めた計画と神の予知によって〉のことだから彼らに罪も責任もないとペテロは言っているのではありません。むしろ逆です。「あなたがたは…殺したのです。」しかも「律法を持たない人々の手によって」、つまりイスラエルの人々から見れば全く神なく罪深い異邦人の手を借りて、使って、罪人たちのやり方で〈十字架につけて殺した〉のです。イスラエルの人々にとって「生ける神の子キリスト」が〈死の苦しみ〉を味わい、〈十字架〉につけられて殺されるなどということは絶対にあってはならないことだったのに、彼らがイエスを〈十字架につけて殺した〉ということは即ち彼らがイエスを「生ける神の子キリスト」だとは認めなかった、信じなかったという〈証し〉にほかなりません。そうやってイスラエルの人々は、約束通りに先ず最初に彼らに〈この方を証しされ〉た神に真正面から逆らったのだ、これほどの恩知らず、恵みを無駄にする罪はないとペテロは指摘したのです。

〈しかし、神は〉とペテロは続けます。〈しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。〉(24) イスラエルの人々は神に逆らってイエスを殺した、死なせた。しかし神も彼らに負けることなく逆らった。彼らが殺したイエスを神は〈死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。〉そうやって神はイスラエルの人々に完全にお勝ちになった。人々の背後にいて彼らを支配している悪魔と死の力に明らかに勝利なさった。そうペテロは宣言したのです。〈死の苦しみ〉とは十字架に釘で手足を打ち付けられつるされての肉体的苦しみ以上のことです。それはイスラエルの人々だけでなく異邦人も含めたすべての人間—即ち私たち—の罪に対する神の怒り、さばきをイエスが罪無き本当の人間としてそのたましいと肉体で、文字通り全身全霊でお受けになっての苦しみであり、からだもたましいも神に棄てられ、神と引き離される苦しみでした。それは私たち罪ある人間の身代わり、私たちのための〈死の苦しみ〉であり、イエスを「生ける神の子キリスト」救い主と信じて従う者—私たち—を神の罪に対する地獄のさばきである永遠の〈死の苦しみ〉から免れさせてくださるものでした。それが〈神の定めた計画と予知によって〉成されたこと、神

の大きなみわざです。そのように〈神の定めた計画と予知に〉完全にお従いになって〈死の苦しみ〉をお受けになったイエスを神は〈死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。〉なぜなら〈この方が死につながれていることなどあり得なかったからです。〉とペテロは言い、それは詩篇に予め〈神が定めた計画と神の予知〉として預言されていたことの成就として次に確認するのです。

神は私たち人間の罪に負けることも、死と悪魔に負けることも絶対にあり得ません。神は私たちの罪のために十字架で死なれた御子イエス・キリストをよみがえらせ、そのイエスに信頼する私たちをも死の苦しみから解き放ってお救いになる良きご計画と予知を持っておられ、それを必ず実行してくださいます。この神の前に私たちはいるのです。

イエスご自身が既に何度かペテロたちに、ご自分がエルサレムでユダヤの祭司長たち律法学者たちに引き渡され、異邦人に引き渡され、十字架につけられ殺されるがしかし三日目によみがえらされるということをお話しになっていました。ペテロたちは実際に復活のイエスに出会い、そして約束の聖霊を祈り待ち望み、ついに聖霊が降って